

美術の窓(17)

ガンダーラの彫刻展について

大和文華館館長 吉川 逸 治

開館二十五周年記念の特別展として「ガンダーラの彫刻」を開催し、東洋の古典的人間像の源流という副題をつけましたが、これまで主として仏教彫刻の一流派として観賞される機会が多かったのに対して、この際、古典古代の美術の一流派という世界美術史の流れのうちにガンダーラの彫刻を捉えて見ようと試みました。

ガンダーラの美術(絵画もありますが)が、アレクサンドロス遠征から数百年を経て、今日のアフガニスタンからパキスタン東北部に、しかもイラン系の民族のクシャーン王朝のもとで、開花するのは驚くべきことだと感じられます。バクトリアのギリシア王朝が存続し、あるいはパルティア人の支配が継続して、西方ヘレニズム世界との交流が続いたと想像し易い時代を過ぎて、この地にギリシア・ローマ風の古典美術が開花し、栄えるのですから。

しかし、古典美術が発達するためには、これを要求し、支持し、展開させるために、それに適した精神的基盤、古典的思考体系が成立していなければならず、まさにこの時代、インド世界の西北部に仏教思想の古典的体系化が活発に行われていた事情が、これら彫像や釈尊物語浮彫を見ましても窺われます。

これだけ整然と組織だった独自の古典美術の成立と発展は、この時代の東西美術を眺めても、ローマ帝国の美術を除いては見出されません。ローマ帝国は、やがて「神の国」となって、キリスト教古典美術という彫像なき変則的古典美術に移行し、その上、平面性志向や鉄線描の導入というオリエント・プリミティヴィズムの影響を蒙り、さらにゲルマン侵入による帝国の権威没落後は、西ヨーロッパにケルト・ゲルマン系の文様美術の盛行を催すことになり、八世紀のカロリング朝成立によっても古典様式の復興は容易なことではなかったのです。

ガンダーラの古典美術は、その人間形態中心主義をもって、思想の美術たる地位を確立し、かつ自然主義(写実主義)と理想主義を伴って、豊かな自然のイメージと次元の高い形式の成立、技巧の練成を催し、インドのクプタ朝美術、中国の隋唐の美術、わが白鳳、天平の美術の成立に継承され、それぞれの民族の古典文化の育成に貢献するところが著しかったと思います。

単独の如来像、菩薩像によって、それぞれ観念を凝集し、それに付随する諸要素―手印、持物、服飾、他の像の追加など―を加えて、中心観念を解説し、あるいは多様化し、教義を明瞭に解説しつつ、思

念するようしむけます。やがて、単独像から変相図、曼荼羅へと発展する段階が想像できます。他方、釈迦御一代記の連続浮彫も、釈尊像を主役の人々の身振り、行為行動を写實的に、しかも品位をもって具体化し、明瞭に、旋律的に読みとれる叙述の美術を形成します。民族臭とか地方性を超えて、万人に訴える性格、即ち古典性の特徴を発揮します。

古典美術は、古典古代の美術だからといって、もちろん当初から古代ギリシア人に備っていたものではない。彼らは紀元前五世紀にいたって、何世紀も古代世界の間像を呪縛していた正面性の法則を破り、運動する人体像、遊脚支脚の上に立つ自然な人体像を創造し、それと同時に理想的な人体像に、様々な神々についての観念を明瞭に宿らせ、一見して、ゼウスかアポロか、ディオニソスかヘルメスカを解らせることとなり、さらに進んでは人間自体の理想美の姿に人間の理念乃至情念を宿らせ、喜怒哀楽を明示し、あるいは擬人法によって、自然現象、日月風水を人体像で示すという人間中心主義の文化体系を作りあげて、古典古代の文化とするのでした。美術のみならず、演劇、文学、思考形式も人間中心に整頓される。

また逆に、思考や言語の形式が



如来立像(部分)

古典性を体得しなければ、古典美術は生まれえないし、たとえ古典美術が傍にあってもそれを理解し、影響を受容しようとしません。イタリアが隣のギリシアから古典美術を受容するのは、紀元前一世紀になって、キケロ、セネカ、ティトス・リウィウスらの古典文学が形成される時代になってからです。

中国美術でも顧愷之や謝赫の時代では、未だ古典美術を本当に受容する段階にはなかつたでしょう。顧愷之が人物を最も尊重したといっても、隋唐の人物画にみる権威ある裕然たる自然体には描かず、まだ文様の律動感のうちに描いていたに相違ありません。「画の六法」も、古拙様式から古典様式への推移を志向するものといえましょう。気韻生動とは、瀧精一先生の指摘された如く、客観的に画中の諸物諸像、線、点が宇宙生気の脈動を图示するもので、原始美術の神靈的表現の伝説が残っているものです。骨法用筆になると人体や自然のデッサンに関するもので、応物象形、随類賦彩も、古典の基礎となる自然主義への歩みよりが窺われ、経営位置は構図法として、文様のや図面的な山水図より人間の視覚の立場を強調するものと解されましよう。しかし、これらの意図が古典的作例に実現されるのは、次の時代です。

季刊 美のたより No.73

昭和60年 11月 21日

発行 大和文華館